

新年随想

産業における技術の使命

会長 池田悦治

(大日本塗料KK社長)

ふり返って見て40年は、産業界にとって極めて波乱の年であった。循環的な不況要因と、構造的な不況要因とが重なり合って、絶対的だともいえる深い不況の一年であったのである。

経済の社会が、そのときどきの政治や、企業の運営によって環境が変わって来ると、まことに敏感に、或いは好況を呼び、或いは不況となるのに比べて、われわれの社会文化は、何の揺ぎもなくひたぶるな進展を続けているように思う。人類は、寸時も止ることなく文化を創り重ねているのである。

このことが、われわれの経済社会にとって重要であるのは、昨年のように、不安で明け暮れた経済人が、来る年に希望をもち、勇気をもって明日への新しい計画を立て得る原動力を、不断に進展している文化に求められるからである。

われわれがたとえ主観的な齟齬から、またはそのときの政治の貧困から、その企業に、或いはその業界に不況をもたらしたとしても、計画の立て直しや、政治の方向転換によって、経営が改善され経済が安定すると確信出来るのは、経済現象の変転にもかかわらず、人類の文化は絶えず進展を続けているという基底を知っているからである。

もともと人類は、常に前向きな人生を遂げるための活動を続けていて、われわれはこれを文化の創造活動と呼び、社会生活の本質と理解しているから、ここに基点を置いて考えれば、経済はそのときの文化を土台とした上層建築である。言葉を換えていえば、好況や不況があるにしてもわれわれの文化が進展するに連れて、経済は大きく飛躍して、やがては社会の繁栄をもたらすのである。

翻ってわれわれが現に生活本流として意識している文化の創造活動の源流に、大きく座を占めているのが技術である。もっと根本的には学術といった方が適切であろう。

実に学術は、われわれの日常現象の転変に煩わされることなく不動の足取りをもって、静かにしかも強く、前

へそして未来へ歩み続けている。学術に根をもつ技術も亦学術と同じように毎日こうした進展を続けているのである。

産業界が、つまずいたり転んだりして同じ世界を堂々めぐりしている間にも、技術はそれ自身の困難な壁に突き当たったり、失敗を重ねながら絶えず前進している。

こうして社会進展の源流に技術の不撓な進歩を観念するとき、われわれは産業の将来に大きなビジョンをもつことが出来、これが常に産業発展の推進力となっているのである。

このように技術の果す役割は極めて大きい。経済の不安定から来る思想の混乱や、社会秩序の不統制が多い現代にあって、静かに学術に根を下ろした技術の源流が、あたかも河川における地下水のように、幾多の風雪晴雨にかかわることなく、不断の進展をつづけて行くとき、人類の文化はたゆまず進歩している。そしてその香気に充ちたわれわれの社会は、希望とこれを具現しようとするたくましい力を取り戻すにちがいない。

重ねていえば、余りにも動揺と不安の多かった40年の経済社会を体験して来た産業人が、つまるところ明日のビジョン創造者とならなければならないことを自覚すると、もうじっと立ちすくんでいることは許されない。何かの拠りどころを捉えて果敢に前進を開始しなければならない。この拠りどころこそ技術である。

平穩無事の成長経済下にあっては、**技術**はまことひそやかに足音をしのばせつつ明日への歩みをつづけていたのだが、一旦波乱の経済を迎えた今日では、最早や**技術革新**の大旗を掲げて、産業界の指導に任せねばならぬ。日頃訓練された、冷徹な学理の上に立つ自己のペースを乱すことなく。

生産と技術の使命は、かくて時流により変革する。今こそ全産業人の信頼に応えて、八面六臂の活動を期すべきときである。あえて経済の安定を指標して。

新春を迎えて決意の新たまるのを覚える。